

第十話 (A.D. 358)

アルゲントラトゥムの勝利は地中海世界を沸き立たせた。

何せ、ローマにはここ百年なかった大勝利だ。後世のキルレシオで考えても、約二十四対一——二十四人のゲルマン兵が命を捨てて挑んでも、一人のローマ兵を仕留めれたか否かという戦場だったのだ。

既に皇帝ユリアヌスの名は伝説として語られるものであった。

「というわけで。内政だよ内政。わーいわーい」

ユリアヌス二十七歳はキャツキャツと喜び、ルテティア（現パリ）の宮廷政務室へと走った。トゥールトには理解しがたいが、ユリアヌスは元々文人肌である。戦場に立つ方が不思議なヘタレ野郎なのだ。本来こちらの方が性に合っているのだろう。いやしかし……

「アラマンニを倒しても、蛮族がいなくなった訳じゃない、例えば、フランクは……」

「大丈夫大丈夫、アルゲントラトゥムのついでに倒したフランク族もちゃんと正帝のところへ輸送したしね。冬営中の隙を見て、トングル辺りに速攻をかければ、北海まで兵力を展開できるさ」

ユリアヌスはまるで既定事項のように語った。

——これが油断ではなく、余裕なんだからな。人間、変わるんもんだ……。

トゥールトはその事実背筋を震わせる。ただ、念のため、聞いておく。

「確認しておきたい。アキタニアからの援軍到着は待たないんだな？」

「うん。実はあれ陽動だったんだ。黙っててごめんね。食料は二十日分の堅パンのみで行こう。シヤハラザード、用意しておいてね」

「は、はいっ！ かしこまりました！！」

シヤハラザードは背筋を伸ばして答えた。

最近、シヤハラザードは事務作業の一部も担当している。理由は彼女自身が申し出たからだ。対するユリアヌスが受け容れたのは、信用できる官僚が乏しい故の苦肉の策である。

しかし、シヤハラザードはその職務を天恵の様にありがたがっていた。さすがにペルシヤ人、しかも間諜らしき娘である以上、書類上は幾つかの偽名を用いていたが、それでも全力で取り組んでいた。この返答一つにしても、まるで、憧れの貴人から声をかけられた奴隷女である。

とはいえ、このシヤハラザードの態度も、後から考えれば、無理なからぬ話だろう。

この時、既にユリアヌスの戦術眼と用兵力は貴人というより神仙の領域だった。すなわち、兵力展開はすべてユリアヌスの目算通りに進み、フランク族はその神速の行軍を前に成す術も

なかった。結果、勇猛果敢なはずのフランク族が一戦も交えずに降伏するのだ。

だから、ユリアヌスは内政へ重点を移し、書類仕事に挑む事にしたらしい。

——まあ、あたしが口を挟める話でもないか……。

トゥルートはしんみりしながら思う。

実際、内政分野についてはユリアヌス自身に予備知識がある。故に比較的円滑である。逆にトゥルートは槍働きしか能がない。軍隊生活は長いから、実務作業については助言できるが、それもユリアヌスがこの三年でほぼ吸収済みの事柄だろう。

「とりあえず、宮廷関係費を半分にして、救貧法予算を二倍にしよう！」

……だからというべきか、ユリアヌスは子供のように革命的な事を言いやがった。

トゥルートが恐る恐る常識人サルステイウスを見る。想像通り、彼は絶句していた。一応、「よいのですか？」と尋ねてみると……。

「わ、若者らしくていいではないか……」

サルステイウスは冷や汗を流しながら、かろうじてユリアヌスを擁護した。だが、さすがに今回は余裕がない。当然だろう。ユリアヌスが大胆な理想を唱えるのは毎度の事だが、それを現実の政策としてやり遂げるのはサルステイウスたち実務官僚なのだ。

トゥルートは——こりやあ、頭が痛いはず——と同情していたが、サルステイウスには別の思惑もあるらしい。

「いや、しかし……実際悪いとも言切れないのだ。私はもうこの歳だから、大胆な改革には躊躇いが出る。が、ユリアヌス様のような未来ある若者ならば、避けて通れない道だろう」

「……と言いますと？」

「元々、この百年で宮廷関係費は膨らみ過ぎた。東方的な専制君主制による典型的な弊害だ。遅かれ早かれ、大蛇を振るわねばならなかった……」

サルステイウスは渋い顔をますます渋くする。

——そういや、このオッサン、元々は財務官僚だったな。

トゥルートは久々にサルステイウスの前歴を思い出した。すると今度はサルステイウスの方から補足する。

「お前にはこう言えばわかるかな？——今の正帝コンスタンティウス二世陛下が抱えている皇宮使用人経費は、全ローマ軍団にかかる経費を、上回っている」

「え？」

一瞬、トゥルートはサルステイウスが何を言っているのか分からなかった。しかし、「じゃ、じゃあ、あたしらの苦労はなんなんですか！？」

すぐにトゥルートは口調が乱れるほど赫怒した。根が単純なので主張までもが一変した。

「その金を前線に回してもらえれば、蛮族も容易く一掃できる！ それだけじゃない。戦場で略奪が流行るのも、元をただせば、給料の未払いが続いて、略奪しなけりゃ餓死するからです。それでも略奪は略奪として……」

「裁かねばならないユリアヌス様は、少なくとも私やお前よりは辛い」

「……………」

「ましてや、それだけの宮廷費用を使っている正帝はユリアヌス様にとっては叔父も同じだ。ならば、せめて自分の宮廷関係費ぐらいは削っておきたいとお考えなのだろう」

意味があるのか？——とトゥルートは思った。

なるほど、ユリアヌスが自分の宮廷関係費を削れば、それだけ財政は楽になるだろう。そもそもユリアヌスは宮廷にいるよりも戦場を巡っている時間の方が長い。元々、無駄な費用である。しかし、根本的にユリアヌスが使っている経費はたかが知れているのだ。身なりが粗末なのは繰り返した通り。食事も麦粥ブルスに醬油ガラムをかけて満足している。寝る時も副帝カエサルの外套に包まるが、その下は地べたという事は多い。唯一の贅沢は読書だが……これを贅沢にしまうと、酒と肉が大好きなトゥルートはどうなる？

結局、東側で大量に金を垂れ流している正帝が……。

「ああ、言うておくが、正帝コンスタンティウス二世陛下のやり方に理がないわけでもないぞ」

サルステイウスは突然正帝弁護に回った。トゥルートの内面を読みとったのかもしれない。曰く、贅沢には需要と雇用を喚起する側面があり、経済が発達している東側では必要な部分もある。実際、そうして発達した経済の結果、時々、東側はこのガリアへ麦を援助できるのだという。

「……たしかに麦はありがたいですがね。その経済とやらも『平和』パイクスあつてのものでしょう？」

「軍人の発想だな」

「すみませんね。突撃馬鹿なもんで……つて、前にもやりませんでした？ このやり取り？」

「ああ、もうあれから三年か」サルステイウスは懐かしむ。「しかし、あの頃はお前も言っていただろう。人の上に立つなら権威が必要なのだ。そして、権威を演出するには、豪華な服、豪華な冠、派手な取り巻き——とどのつまりは金を使うのが一番なのだよ」

「あれはあたしが間違っていました。結果さえ示せば、権威など後からついてきます」

「ほう、意見が真逆になったな……惚れたか？」

トゥルートは焦った。考えてみれば、この男には心を許している。だからこそ、注意が疎かになっている。ばれているのか？ あるいはばれている上で泳がされているのか？

「——いずれにせよ、誰もがユリアヌス様のようになれるわけではないのだよ」

トゥルートは迷っていた。だから、このサルステイウスの箴言を軽んじてしまった。

「す、すみません！」

そこでシャハラザードが突然大声を上げた。そして、ユリアヌスに問いかける。

「そもそも『救貧法』ってなんですか？」

「どうやら、翻訳の問題らしい——とシャハラザード以外の三名が苦笑した。大方、東方では『救貧法』に相当する法律の名が微妙に異なるのだろう。ならば、東方娘のシャハラザードが理解できないのも無理はない。そして、ユリアヌスは空気を読めないもので、シャハラザードの混乱に気付かないまま、話を進めてしまった。そんなところか。

ユリアヌスも反省したらしい。相変わらず文人的な婉曲さだったが、シャハラザードへ助け船を出す。

「救貧法についてはペルシャにも似たような法律はあると思うよ。むしろ、なきやおかしい。文明国であるなら、あってしかるべきだ。えと、《鰥寡孤独》だっけ？ この四者はペルシャよりもさらに東でも国家の保護の下にあるというじゃないか」

「あ、『老而无妻曰鰥、老而无夫曰寡、老而无子曰独、幼而无父曰孤。此四者、天下之窮民而无告者。文王發政施仁、必先斯四者』——『老いて妻無きを鰥と曰ひ、老いて夫無きを寡と曰ひ、老いて子無きを獨（独）と曰ひ、幼くして父無きを孤と曰ふ。此の四者、天下の窮民にして告ぐる無き者なり。文王は政を發（発）して仁を施すに、必ず斯の四者を先とす』ですネ」

「そうそう。【孟子】だっけ？ 君の話から聞いた東方説話でも、特に感慨深いから、覚えていたんだー」

ユリアヌスはシャハラザードを慰めた。シャハラザードはシャハラザードで翻訳完了する。

「そして、この《鰥寡孤独》のような社会的弱者への救済措置こそが『救貧法』であると——理解しました。また、ご推察通りです。ペルシャにも似た法律はありますね」

シャハラザードはこんこんと己の頭を叩く。

「察しが悪くてすみません。ローマと言えば、『パンとサーカス』の印象が強かったので……」

「それは昔の話。今では『本当に困っている人を助ける』制度になっているから」

ユリアヌスが今度はトゥルートに視線を向ける。

「ね、トゥルート？」

「ん、ああ、そうらしいな」

うっかり空返事になってしまった。するとユリアヌスは怪訝な顔をした。

「あれ、君は戦災孤児だったんだよね？ ばっちり救貧法の対象だったと思うんだけど？」

「……孤『児』って言っても、十歳だったけどな」

女は初潮が来れば、もう大人——という感覚のトゥルートからすれば、『児』と呼ばれると、ピンとこない。

しかし、ユリアヌスはますます首を傾げる。

「でも、戦争の犠牲者で、身寄りもなかったんだらう？」

それが救貧法の対象にならないのはおかしい——と言いたいらしい。

トゥルートは恥を忍んで、当時の実情を一部開陳する。

「いや、それがあたし、読み書き苦手だからさ。役所にツテもなかったし、教会に知り合いもいなかったし」

だが、ユリアヌスは顔をしかめる。

「へー。……って、それ、おかしくない？」

ユリアヌスは突然「極秘で現場視察に出る！」と言い出した。

選抜されたのは、皇帝ユリアヌス自身、筆頭衛士トゥルート、騎兵長官セヴェルスの三名だ。何度か述べたが、ユリアヌスはみずばらしい恰好させたら、天下一品である。

トゥルートも『女装』して、弱弱しい態度を取らせれば、か弱い乙女に見えなくもない。

セヴェルスにいたっては真正銘の老体である。

……つまりはそういう事らしい。この三名なら身分を偽って、救貧法の実態を調査し易いという寸法らしい。

だからと言って、皇帝自ら——という事で、サルステイウスの頭痛の種は甚だ増えたものの、結局は許可された。不本意ながらもユリアヌスのやり方には慣れつつあったし、トゥルートとセヴェルスがいれば、護衛も十分でもある。

この三人の街歩きは様々な挿話に彩られた珍道中だった。

そんなこんなで、救貧法の給付役所に辿り着く。

救貧法担当の役人は三人をじろじろと見た。

ユリアヌスは賤民にしか見えないし、トゥルートは女性にしか見えないし、セヴェルスは老人にしか見えない。シャハラザードやサルステイウスと違って、ユリアヌスが高貴さとは無縁なのが幸いした。実際の社会的地位に反して、救貧法対象者と認めてもらえたらしい。

「では、この書類とこの書類とこの書類を書いて下さい」

と、役人が複数の書類を提示する。

「えっと、これ書かないと貰えないんですかー？」

「救貧法は『本当に困っている人を助ける』制度。よって、本当に困っている事を書面で証明せねばならないのです」

「なるほどー」

ユリアヌスのわざとらしい応答がなんとなくトゥルートの癪に障った。

「ま、ユリアヌスにすれば、自分の領地で法律が厳正に運用されていたんだ。嬉しくないわけがないか……」

トゥルートは自分に言い聞かせ、提示された書類に向かう。

「だがこれは……難しい。」

自分が天涯孤独な十歳少女だった頃、救貧法受給を諦めた思い出が甦る。

『読み書き苦手だからさ。役所にツテもなかったし、教会に知り合いもいなかったし』

あの台詞に嘘はない。トゥルートは半文盲だ。読み書きが全くできないわけではないものの、役人の提示する書類を過不足なく仕上げられる程ではない。

——救貧法は『本当に困っている人を助ける』制度。

この役人の言葉にも間違いはない。だが、

——よって、本当に困っている事を書面で証明せねばならない

と言われても、トゥルートはろくに教育を受けていない。書面に記す技術に欠けるのだ。

十年前も同じ理由で断念した。しかし、トゥルートもこの十年で成長した。それは槍の腕と背丈と胸と尻だけではない。ローマ軍では情報伝達の必要から、簡単な読み書きを教えている（全盛期なら、測量や建築の技術まで完璧に叩き込まれたぐらいだ）。だから、十年前と違い、トゥルートも何とか筆を動かせる。

「……む、むう……難しいでげすなあ」

と、セヴェルスも隣で脂汗を流しながら、ゆっくりと筆を動かしている。

トゥルートは改めてこの老人に親近感を抱いた。セヴェルスもまともな教育を受けていない事は想像に難くない。今や騎兵長官のセヴェルス翁であるが、言わば『猛将』で、間違っても『知将』ではない。いや、その辺りはトゥルートも似たり寄ったりだが、それこそトゥルートと同じ理由で、完全な文盲でもないらしい。

だがそれでも、役人用語はわかりにくい。少なくとも、軍隊で必要とされる用語とは違う。進路は西か東か、食料はあるのかわからないのか、敵数は百か千か——軍隊で習うのはそんな明快な言葉だ。だが、役人用語はまるで違う。現代日本で言えば、トゥルート達軍人は理系の論理で動いており、この役人用語は文系の理屈で成り立っている。

そんな中、ユリアヌスはさっさと席を立った。

「できたー！ って、あれー？ トゥルートまだなのー？ 何なら手伝おっかー？」

——こいつ、殴りてえー！

さすがに文人肌のユリアヌスはさっさと仕上げたらしい。トゥルートが内心憤っていると、「そこ、人のちよっかいをかけない。でき上がったら、こちらへ見せに来なさい」「はーい」と書類を見せに行く。すると、

「む……やや冗長だが、きちんと仕上がっているな」

役人はそう言って、ユリアヌスに銀貨を渡した。

「わーい」

喜ぶユリアヌスがムカついたので、トゥルットも立ち上がる。自信はないが、ちゃっちゃと仕上げた書類を見せに行く。

「これは……いくらなんでも杜撰すぎる。これでは『本当に困っている』とは認められないな」

役人はそう言って、トゥルットを突き返した。

「……ちっ」

トゥルットにも杜撰という自覚はあった。やむをえず、舌打ちして書き直しを始める。しばらく、沈黙のまま、かなりの時が過ぎる。そして、

「よし……でげす」

セヴェルス翁が立ち上がった。ユリアヌスに比べ随分と遅れたが、トゥルットが横目で見た限り、その書類はよく出来ている。考えてみれば、セヴェルスも長官職だ。いかに不得手でも、書類仕事はこなしているはずだ。

しかし……、

「あー、お爺さん。悪いけど、これは認められない。よくできているが、ここの書式が違う」
役人はそう言って、セヴェルスも突き返した。

「ちよっと待って」ユリアヌスは強引に割り込んで、その書類に目を通す。そして、抗議する。
「なんだ。よくできているじゃないか」

「だから、よくできているとは言っている。が、書式が違う以上、認めるわけにはいかない」
役人は権高に言った。「大体、君は何だね？ 先程から、人にちよっかいばかり……」

「僕の正体は君の職務とは関係ない。また、セヴェルスの文章が書式に忠実でないのも事実だ。いつものことだからね。だが、大意を伝えるには十分な出来であるのも、また、いつものこと——困窮の訴えとしては認められるべきだ」

「だから、駄目だとも言っていない。ただ、書式に則って書き直せと言っている」

「しかし、相手は高齢者だよ。高齢者に対し、何度も書き直しをさせるのはいかがなものか？」

ユリアヌスの頭に血が上りつつあった。こいつはそれなりに感情的なのだ。

「おいつ、ユリアヌス。落ち着けて」

トゥルットが慌てて止めに入る。

そこに「何だ？ 騒がしいな」と別の役人がやってきた。そして、

「お、可愛い娘ちゃん発見」

と二人目の役人は好色な視線をトゥルットに向けた。

トゥルットは自分が『女装』している事を思い出す。日頃束ねている長い髪が露わになって

いるのだ。男が寄ってくるのはむしろ必然だった。

嫌な予感そのままに、二人目の役人はトゥルートの書類に手を伸ばした。彼は目を通した後、おおよその事情を察したらしい。優しさ半分と下心半分で言う。

「御嬢さん、こういう時はこの書類のここを直せばいいんだ。あ、俺が代筆しようか？」

一人目の役人が「おい……それは……」と言いかける。

「いいじゃねえかよ。臨機応変な現場の対応ってやつさ。それにこんな綺麗な女の子、放っておいたら、襲われちまうぜ？ 治安維持の観点から、優先的に救済……」

だが、ユリアヌスの声が二人目の役人の声を遮る。しかも今度は明確な怒りの声だった。

「Περμένετε! Ένας γέρος χαρίς να λαμβάνει τις παροχές, αν θα πάρουν τα επιδόματα εδν ομορφη κοπέλα! (待て！ 男の老人は給付を受けられず、美しい少女は給付をもらえるのか！)」

「ユリアヌス、落ち着け。ギリシャ語になってる……！」

こうなるとてんやわんやである。その役所では始末に負えなくなった。

「ああもう、そんなに飢えているなら、あつらへ行けばいい！」

一人目の役人は地団駄を踏み、そしてその街の教会を指差した。

「教会では『キリストの肉』が貰える！ ここで騒ぎたてるよりは確実だ！」

キリストの十字架を掲げる教会では、たしかに貧民へパンが配られていた。

「こんなの間違っている！」

ユリアヌスは宮廷に戻ってから憤っていた。

「第一、僕が真っ先に給付を受けられる事自体がおかしい！」

これはユリアヌスが貧困ではないという意味ではない。ユリアヌスが最も適切な書類を提出できたのなら、それはそれだけの文章作成能力がある証である。そんな男なら、救貧法の助けなど借りずとも民間で働き口がある（性格にはやや難があるが）。むしろ、適切な書類を提出できない人間こそが、最も助けを必要としているのではないか？ 例えば、ユリアヌスとて、病や老いで床に伏せれば、そんな文章作成能力を失うだろう。そして、国家の助けとはまさにそんな時にこそ必要なのではないか？

「なのに、実態は逆だ！ セヴェルスのように読み書きに慣れぬ者、老いや病に苦しんでいる者ほど、給付を受けられない！ こんなの間違っている！」

ふーふーとユリアヌスの息が荒くなる。まるで生理二週間後禁欲中トゥルートの様だった。ところが、そのセヴェルスが言った。

「あのう、陛下。一人目の役人に何か褒美をやってはいけなないのでせうか？」

ユリアヌスは驚く。

「な、何を言っているんですか。セヴェルス老！ 彼はあなたの訴えを無視したのですよ！」
 「ですが、それは私事です。彼は己の職務に忠実であっただけの事では？」

「……あ……」

「わしは無学です。だから、政治の事などさっぱりです。しかし、戦場生活は長い。だから、兵隊に例えて言うでげすがね、上が進めと言えば、進むのが下の仕事。下が勝手に動いては、組織は成り立ちません。そして、彼は上に従っただけの事です」

「い、いやでも、その結果、一人のお年寄りが飢え死にするかも……」

「これは陛下にだから言いますね——その罪は彼ではなく、陛下らにあるのでは？」

「……！」

「重ねて、戦に喩えます。わしらが兵士らへ『盗賊の根城になっている山奥へ行って、盗賊を討ち果たしてこい』と命令したとします。ところが、兵士たちが山奥に行っている間、盗賊が街に攻め入って来て、大きな被害が出た——この責任は命令したわしらでげえすか？ 命令に従った兵士たちでげすか？」

「そ……それは命令を出した僕らだ」ユリアヌスは認めつつも、自分でも苦しいと思う理屈を言ってみる。「だが、それは理論上の話だ。実際には現場の裁量権というものも認められる。

あの役人たちも、ちゃんと一人一人の人間を見て……」

「その結果がトゥルート殿にだけ、便宜を凶ろうとした二人目の役人でげす」

「……」

「正直、今日は役人というものを見直したでげす。いや、これこそ、私事でげすが……わしの素顔は醜い。歳をとって、皺が増え、髭を生やしてからは、それなりの扱いを受けるようになりましたがね。若い頃は醜面ししづら、醜面ししづらと歩いているだけで石を投げられやした。トゥルート殿のような綺麗な顔が若い娘子にチャホヤされる陰で、一人腹を立てていたものでげす」

トゥルートは気まずそうに頬をかいた。

「ですが——真に腹立たしいのは、わしもそんな思いをしていながら、歳をとって偉くなり、いざ自分が『選ぶ側』になると、やはり見目麗しいものを最良ひしきしそうになっていた事でげす」

……それは人間なら、仕方のない事だろう。そも、見目麗しいものを最良ひしきしそうになっていたというより、最良ひしきしそうになる存在を見目麗しいというのだ（これを【同語反復トートロジー】というのだろうか？）

だが、セヴェルスには辛かったという。

「しかし、今日は違った。あの一人目の役人は書類しか見ていなかった。人によっては融通の利かない冷血漢と罵るでしょう。けれども、この醜面ししづらのわしと、綺麗なトゥルート殿を対等に扱ってくれた。おまけに……失礼でげすがね、醜さではわしに等しいユリアヌス様をちゃんと一番にしてくれた。顔は直せませんが、書類は直せます。なら、書類で区別される方がずっと

いい」

ここまで言われると、ユリアヌスも立つ瀬がない。

救いを求めて、トゥルートを見たが、彼女は彼女で「セヴェルス翁と同意見」と言う。

「一人目の役人はまともだと思うよ。少なくとも二人目の役人よりはさ……あの手の類に顔で優遇される位ならいいけど……その内、身体を要求されたりするからな」

トゥルートは苦労人だった過去を明かしつつ、「セヴェルス翁に比べれば、恵まれていましたかね」とも続けた。さらに曰く。

「その上、一人目の役人は教会に行けば、飯にありつけると教えてくれた。ありがたい話さ。まー、キリスト教が流行るわけだよ」

「……」

とはいえ、それでいいのか？——とユリアヌスは悩んだ。

勿論、キリスト教が流行っているのは無理なからぬ話だ。昨今のローマ帝国は戦が長引き、飢えが蔓延っている。そこでキリスト教徒がパンを与えてくれれば、誰だって飛びつくだろう。また、こういったキリスト教徒による慈善事業は大いに称賛されるべきだとも思う。キリスト教を胡散臭い新興宗教と見る者は多い。しかし、その者達も、こういった奉仕の精神は清貧の倫理と並んで称賛している。……多分ユリアヌス自身もその系譜に属する。

——しかし、それは本来、市民と国家の手でなされるべきものではないのか？

いや、このユリアヌスの発想は順番が逆だろう。戦乱で市民と国家から、その力が失われたから、民衆はキリスト教のパンに縋らざるをえなくなったのだ。

そして、あの亜使徒聖大帝コンスタンティヌス一世はこの流れをむしろ利用した。キリスト教を公認し、その宗教の力で弱体化したローマの社会機能を補完し、さらに皇帝の権威を強化した。現在の正帝コンスタンティウス二世はその流れの継承者である。

——しかし、この流れに身を任せていいのか？

実際、ここにはトゥルートとセヴェルスがいる。二人ともキリスト教という異教徒だ。また、今更一神教に改宗できるとは思えない。仮に『神々は一柱だとは思わない？』と尋ねても、『【神々】なんだから、複数だろ？』と答えるだろうし、『神を蔑ろにしてないかい？』と尋ねても、『ええ。わしはオーデインとやらの社も尊んどりますよ』と答えるだろう。

——……東方での特に熱心な一神教の布教活動を知ったらどうなる事やら……。

いずれにせよ、二人とも本質的に強い人間だ。何だかんだで【神】に縋らず、生きてきた。今も救貧法の恩恵にあずかれなかったが、嘆く気配はない。むしろ、己に足らざるを学ぶ良き機会と言わんばかりだ。

——でも、僕はそうではない、弱い人間のために働かなくちゃいけないんだ……。

素寒貧から、筆頭衛士や騎兵長官にまで上り詰める少数の例外を基準にはいけない。

それに——

「……第一、予算はそれなりに取ってあるんだ。何もあんな風に追い払わなくても……」

「あー、それ、現場の役人からすれば、やむを得ないところがあるかと……」

そこでシャハラザードが手を挙げた。

「どういう意味？」

「現場にはお金がないんで」

「だから、救貧法予算は確保してある！ まさか、横流しがそんなに酷いのか……?!」

軍隊でも横流しはあった。残念ながら、役所でも横流しはあるだろう。それは覚悟していた。

しかし、何事も程度の問題だ。ユリアヌスの集めた予算が全く現場に届かない程に、横流しが酷いなど……。

「いや、横流しというよりも、中抜きが酷いですね」

「中抜き？」

「ええと、大雑把に予算の流れを説明しますと……」

皇帝ユリアヌスが銀貨一万枚を『本当に困っている人』のために用意し、官僚Aに渡す。

↓

官僚Aが『本当に困っている人』基準認定委員会を作る。何故なら、『本当に困っている人』を助けるためにはまず『本当に困っている人』を決めねばならないので。なおこの時点で、人件費として銀貨百枚を消費。残り銀貨9900枚。

↓

官僚Bは『本当に困っている人』基準認定委員会の会場運営費として、また銀貨百枚を消費。残り銀貨9800枚。

↓

官僚Cはそも『本当に困っている人』基準認定委員を集めるための宣伝を打った。だって、広く市民から意見を募集しないといけないし、自分で募集すると縁故採用の疑いがあるから。宣伝広告費として、銀貨百枚を消費。残り銀貨9700枚。

↓

「……ねえ、シャハラザード。僕、頭痛くなりそうな気がするんだけど……」

「では、結論を述べましょう。もつとも、陛下のご推察通りでしょうが」

↓

官僚Zは銀貨を『本当に困っている人』に配る仕事に取り掛かるのだが、この時点で残りの銀貨は百枚を切っている。そして、この百枚を千人の貧民にばら撒くの不可能だ。そのため、九百人を『本当に困っている人』ではないとせねばならない。

「……………」

ユリアヌスはやっぱり頭が痛くなった。

「厄介なのは一人一人の官僚を見れば、むしろ職務に忠実だと言う事ですね。汚職がないかと言え、嘘になります、個々の官僚が誠実優秀であつても『構造的』に中抜きが大量発生し、現場に予算が回らない」

「……具体的、定量的な記録は？」

「ええと、こちらに纏めてあります」

シヤハラザードはそう言つて、書類を一式運んできた。

ユリアヌスは目を通し、驚く。それが完成された報告書だったからだ。

「……シヤハラザード、これを全部、君が調べたの？」

「はい」

「わかった。君は退出してくれ」

「はい」

そうして、彼女は執務室をキビキビと後にする。

素晴らしい人材だ！——ユリアヌスは手を握った。

実に優れた調査技能の持ち主だ。勿論、前歴故にサルステイウスなども財務関係には強い。が、人間関係が絡んでくると話は別だ。その点についていえば、あのペルシヤ娘の方が上かもしれない。

「……でも、最近、あの娘、妙に熱心だよなあ。なんでだろ？」

ユリアヌスは不思議だった。いや、シヤハラザードが有能なのは前々からわかっていたのだ。しかし、熱意に欠けていた。勿論、異邦人である彼女にそこまで期待する方が酷だ。それなりに働いてくれるなら、それで満足すべきだろう——と考えていたのだが、最近の彼女はむしろ誰よりもユリアヌスに尽くしてくれる。

すると、傍らのトゥルートが呟く。

「あれは……あまり信頼しない方がいい」

ユリアヌスは意外だった。自嘲の心算つもりだったのだ。第一、トゥルートらしくない。柄は悪いが、陰口を叩く類ではないのだ。

「君がそう言うには、何か理由があるんだよね？」

「……巧く説明できない。……くそつ、修辞学レトリカとやらは、こんな時のためにあるんだな……！」

トゥルートは悔しそうだった。語彙や教養に欠ける故、論理的に話せないのだろう。

ただ、その誠意だけが伝わってきた。

そこでユリアヌスも思案をまとめにかかる。

「……セヴェルス老、君も席を外してくれないか？」

「了解でげす」

そうして、彼は執務室をのしのしと後にする。

これでユリアヌスはトゥルートと二人きりになった。

「……トゥルート、確認したい。——軍は僕の味方と考えていいかな？」

「ん？ ああ、軍はお前の味方だ。それは断言できる」

今度はトゥルートもすらりと語った。

「現場を握ってる百人長辺りケントゥリオは、とりわけお前に忠誠を誓っている。内心はマルケルスと同じ奴がいても、何もできんさ。当然だな——バルバティウスに従った三万の末路を考えれば」

ユリアヌスはその答えに陰鬱になる。

行方がわからなかったバルバティウスとその配下三万だが、最近ようやく消息が判明した。

……生存者の証言によると、バルバティウスはユリアヌスと『別行動』を取ったものの、その後、ゲルマン人に襲われ、ほとんどが殺されたのだという。

バルバティウス自身はともかく、三万の兵士達は上官の命令に従っただけだ。その落命には悼まざるを得ない。

しかし、これはかえってユリアヌスへの忠誠を集める結果となった。

実際、元バルバティウス配下の生存兵は、皆一様に「自分もユリアヌス様の下で戦いたい！」と申し出た。ユリアヌスは乏しい兵数でありながら、より少ない犠牲である会戦に勝った。バルバティウスは三万もの兵士を無駄死にさせた。ユリアヌスは意外と仕え難い男だ。規律に厳しく、また強姦や略奪を許さない上官だ。しかし、兵士を無駄死にはさせない。それどころか、連戦連捷の大勝利に導いてくれる。どちらに仕えたいかは明白というわけである。

「そうか……では強引にいこう」

——皇帝カエサルの起源は独裁者ディクタトルにこそあるのだから。

ユリアヌスの政策は簡潔だった。

「複雑化した社会制度の解体。古典的で単純明快な食料配布。言わば、『パンとサーカス』への回帰を行う。全体で見れば、こっちの方が安くなるからね」

市民権に対し、一律機械的に小麦を配布するだけの政策だ。これなら、読み書きが苦手でもその恩恵にあずかれる。ましてや容姿すがたかたちで差別されることもない。複雑な処理が不要なので、大量の官僚を抱え込む必要もなく、彼らによる（しばしば善意を伴う）中間搾取も排除できる。

それがユリアヌスの論理だ。

しかし、官僚には大不評だった。大量の官僚を抱え込む必要もないという事は、その大半が免職されるという事である。また、これまでは戦争に専念していたユリアヌスが、内政に口を挟み始めた証でもある。なんとしても取りやめさせたいという意見が沸騰する。

数日してその代表格——ガリア総督フロレンティウスが駆け込んでくる。

「ユリアヌス陛下。これは本気なのですか？」

「うん。キリスト教徒は【働かざる者食うべからず】と非難するけど、結局、これが最も合理的だ」

「しかし、それでは労働意欲が！」

「機械的な一律配布なら、働く程に豊かになる。官僚裁量では『私弱者なんです！』と役所で騒げば、働かずに豊かになる。どちらが労働意欲を削ぐかは明白だろう」

「ですが、対ゲルマン戦で国庫は火の車です。市民全員への食料配布など財源が持ちますまい。やはり、ここは『本当に困っている人』への……！」

「でも計算したら、ちゃんと捻出できるよ。それどころか、税金を半分にできる」

「そんな馬鹿な……！ 税金を半分だなんて……！」

というフロレンティウスに財源案を見せる。彼がその書類を読み進めると、額から汗が噴き出した。そして、フロレンティウスはやっとの事で口を開く。

「しゅ、宗教法人への課税ですと……！」

「複雑化した社会制度の解体——と僕は言ったよ。当然、宗教法人への免税措置も根絶する」

「こ、皇帝陛下ともあろうお方が、無知蒙昧な民草と同じ誤解をしておられませんか？ 宗教法人もきちんと税を納めております。ただ、慈善活動や宗教行為について税を免ぜられているだけで……！」

「だから、その免税措置が行政を複雑にし、さらに国家財政を圧迫しているの。言ったでしょ。『複雑化した社会制度の解体』ってね。言っておくけど、別に宗教法人を狙い撃ちしている訳ではないよ。免税や控除の類を一律に無くしているだけ」

「……社会への奉仕を目的としている宗教法人を、自身への営利を目的としている一般企業と同列に扱うべき——と？」

「ああ、同列とすべきだね」

ユリアヌスの動機は、さほど複雑なものではなかった。ユリアヌスの学んだ哲学は、五賢帝以前の社会のあり方を主に論じており、その頃には宗教法人という奇妙なものは存在していなかったのだ。

だからユリアヌスとしては

——宗教法人？ 何それ？ え？ 何で非課税なの？ だって、金もっているじゃん。税金とろうよ。

という単純なものだった。しかし、結果的にこの『単純さ』が今後の第一義となる。だから、ユリアヌスは皇帝の口調でフロレンティウスに言う。

「自身への営利を目的としている一般企業と言ったが、では、麦を作る農民は社会に貢献していないのか？ お前たちは日頃何を食べているのだ？」

「儲けを弱者への喜捨につき込み、己は清貧を貫かれている宗教法人からも税金を取るべきとおっしゃられるか？」

「勿論取るべきではない。だが、それは宗教法人か否かが理由ではない。清貧を貫いているか否かのみが問題だ」

「実務的にも、乾いた雑巾を絞るより、あるところから、とるべきですね」

横から、サルステイウスもフロレンティウスに釘を刺す。

現実の宗教法人は、衰退を続けている帝国の中で、例外的な隆盛を始めているのだ。

フロレンティウスは目を伏せる。だが、その上で

「……しかし、これは……キリスト教徒を敵に回しますよ」

と言った。先程から、宗教法人と言葉を濁しているが、この時代、法人化する宗教団体はキリスト教ぐらいだ。ローマを含む多神教の多くは、それこそ江戸時代以前の日本神道に近い。

つまり、村人が持ち回りで社やしろを祭る程度のもので、専門の聖職者自体珍しい。逆に課税対象になるほど、金も集めているのは、やはり高度に組織化されたキリスト教なのだ。

「キリスト教徒だけではない」

しかし、ユリアヌスはそう言った。

「君を含む官僚、そして、複雑化した社会制度に助けられている数多の既得権益者を敵に回すだろう。……そもそも現行の制度も一つ一つを見れば、実に理に適ったものだ。今、君が宗教法人への免税措置を妥当だと熱弁を振るったように」

「ならば、何故？」

「それが積もり積もればどうなる？」

「……」

自覚はあったのだろう。フロレンティウスは黙り込んだ。

あの救貧法における中抜きと同じだ。中抜きの理由の一つ一つは真つ当なものだ。しかし、それが積み重なった結果、役所の現場まで金が回らず、貧民が飢える事になる。

「……旅人が荷物を背負い過ぎれば、その重さに潰されるだけである？ 仮に、その荷物の一つ一つは実際に必要なものであったとしても？」

「僕と同じ事を考えた者は他にもいただろう。いや、ガリア総督フロレンティウスよ。君自身その先達の一人かもしれない。膨れ上がる財政支出とそれに伴う重税を見れば、同じ結論に辿り着くのは難しくない」

「しかし……財政健全化のための制度解体ほど難しい事はありません。だからこそ、ローマは

…いえ、あらゆる大国は老大国となっていくのです」

「理由は？」

「陛下は既におわかりでしょう」フロレンティウスは苦笑いをした。それは疲れた大人の笑い方だった。「どんな制度にせよ、定着すれば、その恩恵は既得権益です。よって、制度の解体は既得権益の喪失を意味します。そして、既得権益者にとって制度解体が大きな損失を生むのに対して、国民一人当たりの制度解体による利益は小さなものです。故に、既得権益者は身を投げうってでも反対運動を行うのに対して、賛成運動はささやかどころかそも行われない事が多い」

また、官僚にすれば、制度が広範であるほど、失業の恐怖が少なく、制度が複雑であるほど、裁量という権力を手にできる。

「こうして、一度できた制度は不要になっても解体できないまま残ります。やがて、山積みになった制度に国は身動きが取れなくなり、民は押し潰されていく…」

「しかし、例外はある。それがかつての【独裁者】^{ディクタトル}ガイウス・ユリウス・カエサルだ」カエサルは同様の病理に苦しんでいた共和政ローマを元首政ローマとして再生させた。再生される事が出来た。何故か？

彼が三つのものを持っていたからだ。ガリアの戦乱を平定した巨大な実績と、それに基づく強力な大衆の支持と、それを可能にした圧倒的な軍事力だ。この三つには改革への反対運動を黙らせる力があった。

だから、カエサルはこの三つを柱として【独裁者】^{ディクタトル}となり、その強権で共和政ローマの既得権益を踏み躪り、元首政ローマの礎となったのだ。

…奇しくもそれは今のユリアヌスが兼ね備えているものと同じだった。

ユリアヌスも純粋な行政官としてはさほど優れていない。特に実務面ではサルステイウスやフロレンティウスに劣るだろう。しかし、改革を可能する暴力的な条件は満たしている。

——典型的な、そして、文字通りの独裁者誕生だな…。

しかし、ユリアヌスに躊躇う権利はない。今もガリアの民は飢えているのだ。なら、それを救うために必要な処置を取る義務がある。

「僕らはアルゲントラトゥムの勝利で安全保障を^{セクリタタス}ほぼ成し遂げた。だが、長引く戦乱で大衆は疲れている。だから、膨れ上がった税金は半分にし、その上で貧民には麦を配る。これは僕の

【皇帝】^{カエサル}としての決定事項だ」

「それはつまり——逆にそれ以外は切り捨てると？」

「ああ、ゴルディアスの結び目は刃を以って断ち切るしかない」

たとえ、それがダモクレスの剣であったとしても——。

この決意はサルステイウスとの別れに繋がった。

ユリアヌスの改革は予想通り各方面からの猛反発を生んだ。

勿論、支持者もいる。税金が半分になる上、パンにありつけるのだから、当然の話だ。

しかし、既得権益を失う者たちが賛同できるはずもない。彼らも必死だ。遙か東にいる正帝
コンスタンティウス二世へと、ユリアヌスの『横暴』を訴えに行ったのだ。

コンスタンティウスとて馬鹿ではない。一方的な欠席裁判でユリアヌスを断罪などしない。

具体的にはユリアヌスの腹心サルステイウスを指名し、ユリアヌス側の弁明を求めたのである。
こうなると、ユリアヌスもサルステイウスを東方へと送り出さなくてはならない。

勿論、苦渋の決断である。

ユリアヌスは皇帝業務の多忙を押しつけて、ガリアの属州線までサルステイウスを見送った
のだった。

その帰り道、カルケドンでの事だ。

皇帝ユリアヌスは己の筆頭衛士をなんとか慰めようと四苦八苦していた。

「トゥルートの……」

「五月蠅い。黙れ。これは目の汗だ」

トゥルートのはそう言いながら、グズグズと泣いていた。

彼女はサルステイウスと別れてから、ずっとこうだった。いや、別れの瞬間は違った。あの
時、感極まっていたのはむしろユリアヌスの方だった。皇帝の権威など知った事ではなかった。

ユリアヌスは恥も外聞もなく、サルステイウスに抱きつき、「僕の父さん、僕の父さん」と繰
り返した。サルステイウスは感激しつつも、困惑していたが、それこそ知った事ではなかった。

ユリアヌスは幼くして父を亡くしている。サルステイウスのような立派な成人男性がいれば、
父と慕いたくなるも当然だ。そう思っていたが……。

——本当に抱きつきたかったのはトゥルートのかもしれない。

現にトゥルートのは「サルステイウスの親父オヤジいゝゝ」と鼻水すら啜っている。考えてみれば、
トゥルートのもまた幼くして父を亡くしている。サルステイウスに対し、父に対する想いを重ね
ていても無理はない。

いや、トゥルートのだけでない。周囲を見渡せば、共に行軍する兵士の中にも、頬を濡らして
いる者は少なくない。アルゲントラトゥムで終結の目途が立ったとはいえ、ガリアの戦乱は長
かった。トゥルートののように父を失った者も少なくない。サルステイウスは彼ら彼女にとって

まぎれもない父だったのだ。

——『ガリアの父』を代償にまでしたのだ。この改革は必ず成功させねば……。

その時だった。

突然、石が飛んできたのだ。

「え……？」

ユリアヌスは呆然としたままだったが、トゥールトはその身を盾とし、フラスケス儀鉞を振るう。次の瞬間、その石は真っ二つになっていた。

「投石だ！」

トゥールトは叫んだ。その顔も既に衛士のものだ。どうも、ユリアヌスへと飛んできた石を、トゥールトがフラスケス儀鉞で斬り払ったらしい。これだけでも人間離れした腕前だ（なお、後で確認したところ、石の断面は鏡のように滑らかだった）が、彼女の異能はさらに凄まじい。

「犯人は右前方二十歩！ 麦畑の中だ！ 捕えろ！」

トゥールトはそう言った。この状況で犯人の位置を断定したのである。しかも兵士達が半信半疑で指定された場所に向かうと、たしかに小柄な投石犯はそこに潜んでいたのだ。

投石犯は少女だった。歳の頃はトゥールトやシャハラザードと大差ない。

少女は兵士達に捕えられ、ユリアヌスの前に引き出された。

すると、彼女は泣きじゃくりながらも罵倒を始める。

「人殺し！ アンチキリスト！ お前のせいで、弟は死んだんだ！」

「え……」

ユリアヌスはその罵倒の対象が自分だと気付くまで少し時間がかかった。

むしろ、周囲の兵士達が先に怒る。忘れがちだが、今のユリアヌスは歴戦の名将で、内政面でも税金を半分にした改革者である。当然、信奉者は後を絶たない。

「こいつ、陛下に向かって、よくも……！」

兵士の一人が少女にグラディウス剛剣を向ける。

その寸前にユリアヌスは正気に戻った。

「戦友諸君、待ちたまえ！ 彼女に手を出してはならない！」

ユリアヌスの言葉は間一髪で、興奮した兵士の剣を止めた。

「彼女は軍人ではない。従って、上官侮辱には相当しない。むしろこれはクイリテス市民諸君による正当なる抗議である」

読んでて好かった、ガリア戦記。クイリテス市民とコンミリアス戦友を使い分ける事で、軍人の誇りに訴えかける技術である。

「しかし石を投げた！」兵士が言う。「これは傷害であり、抗議を逸脱している！」

「傷害ではない。傷害未遂である」ユリアヌスはトゥルートに改めて感謝した。「それに彼女を見よ。明らかに錯乱している。心神耗弱たる者の障害未遂ならば、精神病院への隔離が妥当。これはハドリアヌス帝の前例でも明らかだ」

本当は同じ五賢帝なら、やっぱりマルクス・アウレリウス帝が好きなんだけど！

「しかし……！」

「ローマは法治国家である！」

ユリアヌスは精一杯の大声で叫んだ。

その叫びは改めて兵士達に感銘を与えたらしい。何名かは自主的にユリアヌスへ敬礼する。ただし、少女にとっては屈辱だったのだろう。「畜生。畜生」と憎悪を繰り返すばかりだ。

「……故に少女よ。一応、事情を聴こう」

ユリアヌスは胸の痛みを抑えつつ、馬上より為政者として振る舞った。

対する少女の説明は要領を得なかった。この手の『抗議者』にはありがちな事だ。

それでも、断片的な言葉をまとめると以下の通りになる。彼女には弟がいて、姉弟の父母は戦乱で殺された。だが、慈悲深いキリスト教徒の手で救われたらしい。教会に連れられて行き、その庇護の下にあった。しかし、ユリアヌスの『改革』で、その教会への援助が打ち切られた。結果、弟は流行り病で死んだらしい。

「そうだ！ ユリアヌス、あなたのせいであたしの弟は死んだんだ！」

——これは……想定済みだった。

ユリアヌスは唇をかんだ。

兵士の一人が苦渋を顔に出しつつも、その姉をなだめる。

「……しかし、それをユリアヌス様に当たるのは間違いだろう。教会への援助が打ち切られたとて、市民への援助が打ち切られた訳ではない。むしろ、小麦の配布などは……」

「あれっぽちの小麦で何になる！ 弟には薬代が必要だったんだ！」

……その姉の主張はすべてユリアヌスが想定していた通りだった。免税などによる教会への優遇政策が行われていれば、教会はその弟の薬代を捻出できた。しかし、教会への優遇政策は打ち切られた。勿論、税率は半分になった上、市民への小麦の配分も行われている。しかし、教会が優遇されていた時に比べ、姉弟の取り分は少なくなった。結果、その薬代を捻出できなくなったという訳だ。

兵士らは苦渋を深めながらも、その姉をさらになだめる。

「同情はする。……しかし、あれっぽちの小麦というがな……。あの小麦で命を救われた者もいるのだ」

「そうだ。あの小麦で俺の母親は冬を越せたんだ。それに税率も半分になった。これもすべてユリアヌス様のおかげだ。もし、ユリアヌス様がおられなければ、今頃、お袋は飢え死にしていた……」

「ふん！ どうせ、異教徒だろう！ そんなの死んで当然だ！ だけど、弟はちゃんと教会に行行って、礼拝を欠かさなかった！ 立派なキリスト教徒だったんだ！ それがどうして邪悪な異教徒を喰わすために、死ななきやいけないんだ！」

「……………！！」

兵士達の中に怒気が生まれた。まだまだガリアには多神教徒が多い。それを『死んで当然の邪教徒』扱いされたのだ。腹を立てる者がいてもおかしくない。

ユリアヌスは重ねて声を上げる。

「ローマは法治国家である！ 故にその錯乱した狂女に手を出す事は許さぬ！ 以上だ！」

再び帰り道、ユリアヌスはもう一度唇をかんだ。

……………おそらく、彼女の話はすべて真実だろうな。

実を言えば、当初ユリアヌスはこれが予算を削減された教会関係者による作り話ではないかと疑っていた。つまり、再び教会に予算が流れるようにするための芝居であると。

しかし、それならば、多神教徒の怒りを買ひ、その一致団結を促すような発言はするまい。つまり、弟を偲ぶ姉の想いに偽りは無いのだ。

だから、トゥルートは言葉をかける。

「ユリアヌス……」

「方針は変わらない」

「……だろうな」

あの時、少女に投げつけられた言葉はユリアヌスの死後まで付いて回る事になる。

【^{アポスタタ}背教者】ユリアヌス！ 地獄に墮ちろ！」

||||| 第十一話 (A.D.359) |||||

「ん、その小男……何喰っているんだ？」

「これー？ 醤油かけ麦粥だよ」

「おいおい、せっかく軍人になったんだぜ。麦粥如きで満足してどうすんだよ」

「でも、おいしいよー。この醤油も混じりっ気なしの本物だしー」

「肉を喰え。肉を」

「あー、蛇はともかく鼠の肉は泥くさくて苦手でき。前に食べた時は辛かったよ……」

「何を訊のわからん事を。ちゃんと豚肉の配給があったろう？」

「うん。でも、実戦の前は消化のいい粥がいいんだよ。満腹だと判断力が鈍るしね」

「熟練兵みたいな口叩きやがって。軍人が肉を喰わんでどうする？」

「いやいや、共和政時代のローマ軍団は粗食に耐えて地中海を制覇したんだし」

「屁理屈言うな。立派な体を作るのも軍人の義務だ。……って、お前ガリガリでヒョロヒョロじゃねーか？ 本当に大丈夫なのか？」

「……実は脂っこいのは苦手で、無理に食べると戻しちゃうんだ……」

「………おまえ、何で軍人になったんだよ？」

「あー、何でだろうね？」貧相な小男は苦笑する。「そういう君は何故戦場に？」

「はっ、決まっているいんだろう。蛮族をこのガリアから追い払って、男を上げるためさ」

「んー、君、新兵？ 蛮族の強さを知っている？」

「はっ、いくら蛮族が強くてもな、ローマ軍に勝てるはずがないだろ。特に今回はユリアヌス陛下が直々に率いられるんだぜ」

「——皇帝ユリアヌスは信頼に足ると？」

「ま、五百で一万を撃退したっていうのは胡散臭いな。けど、一万三千で三万五千を包囲殲滅したのはマジだろ？ きっと今度も驚天動地の華麗な勝利を見せてくれ……」

「それはありえないね」

貧相な小男が明快に否定する。

「五百で一万を撃退した時も、一万三千で三万五千を殲滅した時も、好き好んで寡兵で大軍に挑んだ訳じゃない。挑まざるを得なかっただけだ。でも、今は違う。ガリアの兵站機構は確立している。必要に応じて、万単位の兵士を運用できるんだ。寡兵で挑む理由はどこにもない。今後は規律と補給と装備が整ったローマ軍団数千で、孤立している蛮族軍数百単位を計画的に各個撃破する。五賢帝時代によく見られたシステムティックな必然の勝利が続くよ」

「は？ お前いったい何を……」

「それと君達が実戦を経験する機会も今後は少なくなると思う。というか、ローマ軍団の出撃回数をちゃんと数えている？ クノドマル撃破以後加速度的に減っている。要するにめばしい敵はほとんど潰したから、もう戦うべき相手が残っていないのさ。皇帝業務の大半も戦争から内政に移行している。今回だって、開戦前に敵が降伏する可能性は高いよ。正常機能を始めたローマ軍団に勝てる見込みは薄い上、大人しく降伏してローマ開拓民の一人になった方が生活水準も高くなるからね」

「……何で、貴様がそんな事を断言できるんだよ？」

「そりゃ、僕がその皇帝ユリアヌスだからさ」

ユリアヌスの身なりは相変わらず質素だった。それこそ、兵士に交じっていても気付かれな
い程に。とはいえ、注意深ければ、気付いたはずだ。貧相な小男が尻にひいていた外套の色は
真紅——紛れもない皇帝の証であった。

新兵は絶句しつつも、「あっ」と背後の気配に振り返った。ずっと監視していた筆頭衛士に気付いたらしい。

その金髪に目を震わせ、驚きの声を上げる。

「槍のトゥルルト！ アルゲントラトゥムでクノドマルを捕縛した……あの筆頭衛士……！」
「発言を許可した覚えはない……！」

次の瞬間、新兵は儀鉞フラスケスの柄で殴られた。新兵は頬から血を流して倒れ込む。

——憎まれ役、ご苦労さん。

ユリアヌスは心の中でそう言った。

逆にトゥルルトは後世の鬼軍曹よろしく新兵を怒鳴りつける。

「新兵！ 貴様がとるべき態度は何だ！？」

「はっ！ も、猛省しております……！」

「疑わしいな？ たるんでいるのではないか？」

「いえ、決して、その様な事は……！」

「ほう……？ ならば、腕立て伏せだ」

「はっ！」

新兵はその場ですぐに腕立て伏せを始める。

トゥルルトはそんな新兵を冷たく見下ろしたままだ。

ユリアヌスは、麦粥ブルスと醤油ガラムの旨味を噛み締めつつ、何気なく言う。

「君、新兵の割に随分威勢が良かったよね？」

「……そ、それは……」

「若人なれば、志、大いによし。大言に相応しい働きを期待する」

「はっ……はいつ！」

新兵はむしろ興奮したように、腕立てを速めた。

皇帝ユリアヌスは上機嫌だった。今回は新兵も多いので、彼らの『仕上がり』をどうしても確かめたかった。例によって、お忍びで宿営に潜りこんだのだが、結果は文句なしである。

「うんうん。兵糧は末端まで行き届いているね。栄養状態も十分。体格優良。士気旺盛。やや血気に逸るけど、勇猛さの裏返しでもある。新兵というのはやっぱり気になるけど……まっ、これから学んでくれればいいしね」

しかし、トゥルルトはいささか不機嫌だった。二人きりになると、ぼつりと言う。

「…最近、あの手合いが増えたな」

「んー、戦場に希望を見出す輩？ 僕みたいに初陣で動けなくなるよりはずっとマシだと思うけど？」

「そういう意味じゃない」

「寡兵で大軍を破る事に浪漫を見出す輩？ でもさ、補給の問題があるのも事実だよ。一概に大軍がいいとはいえないんじゃない？」

「そういう意味じゃない」

「じゃ、どういう意味？」

「おまえを人間だと思っていない。軍神か何かと勘違いしている」

「——油断はしないよ」

ガリアの深くまで侵入したゲルマンには、アルゲントラトゥム（現ストラスブール）戦後も流転と抗戦を続けている部隊が少なくない。

今回、ローマ軍はそんなゲルマンの一部隊を追い詰めた。

久々の実戦になるかもしれない。ユリアヌスとて、気を引き締めねばならない。

「彼ら新兵を一人でも多く、生きて家族のもとへ返すために」

ところが、結局、開戦には至らなかった。

そのゲルマンは、万全のローマ軍を一目して、交戦の無謀を悟ったらしい。以前のフランク族と同じだ。それだけユリアヌス率いるローマ軍の強さは圧倒的だった。百戦錬磨のゲルマン軍も——いや、百戦錬磨のゲルマン軍だからこそ、一戦も交えることなく、和議——事実上の降伏を申し出てきたのである。

セヴェルスは『言った通りでげしよ。わしが敵なら戦う前に逃げ出すでげす——とね。ま、逃げる隙もありませんが』と自慢した。

シャハラザードに至っては『百戦百勝、非善之善者也。不戦而屈人之兵、善之善者也』とオリエント東方風に絶賛した。

翌日——。

皇帝ユリアヌスはローマ軍団と共に水道工事へ自ら参加していた。

一応説明する。

昔から、ローマ軍団は土木工事の専門家だった。地中海世界に点在する都市も街道も水道も

その多くはローマ軍団が作ったものである。土木工事は平時における鍛錬を兼ね、また、戦場においてもその技術は発揮され、「ローマ軍はつるはしで勝つ」と言われた程だ。

だから、元々水道工事の予定はあった。ゲルマンとの戦が順調に終われば、辺り一帯の水道網を整備し直そうと言う話だったのである。

とはいえ、ユリアヌスは皇帝であり、皇帝自ら水道工事に鋏を振るうとなるとちよつと例がない。こういった『現場主義』にトゥルートはジト目を隠さなかった。それこそ、サルステイウスなら、絶対に許さなかつただろう。

——「いいや、これはキンキナトウスだよ！ キンキナトウス！ ローマ共和政時代の偉人ルキウス・クインクティウス・キンキナトウス！ 大地主の大富豪でありながら、上古の如く奴隸と共に自ら畑を耕したというキンキナトウス！ このキンキナトウスに倣って、僕も鋏を振るっているんだよ！ 別に最近書類仕事が多いから、たまには体を動かして、頭をすっきりさせたいとか、そんなんじゃないんだからね！ ……てか、キンキナトウスいいと思わない？ 平時は農作業に従事しながらも、元老院から独裁官に選ばれば、市民の義務として、これを承諾。速やかに軍勢を率い、すぐに外敵を打ち破り、その後は農作業に戻る！ 半年の任期である独裁官の地位を十六日間で返上した事もある！ このキンキナトウスの行為には古人のウルトゥス【武徳】が集約されているねっ！ うーん、萌え萌え〜キュン♡」

昨夜ユリアヌスが弁解しつつ、寝台で身悶えていると、シャハラザードまでが軽蔑の視線を隠さなかつた。

——小娘二人でドン引きして…女子供に何がわかる！

ユリアヌスが周囲の無理解（笑）に苛立ちながら、鋏を振るっていた時の事だ。

筋骨隆々としたゲルマンの大男がいきなり近寄ってきた。

昨日、降伏したゲルマンの族長だ。

族長と言っても、ゲルマン人は野蛮人である。それだけに実力（というか、腕力）主義だ。

端的に言って、ムキムキだ。貧弱なユリアヌスなど、腕の一振りですち殺せる事は疑いない（いや、一応は傍にいるトゥルートが対処してくれるはずだが…）。

その大男は言う。

「おい。その貧相な小男」

「な、なんででしょう？」

ユリアヌスは思わず敬語で答えてしまった。どうも、トゥルートといい、クノドマルといい、自分はこの手の野性味に弱いらしい。本当はまだ兄に甘えていたいのだろう。だから、戦わずして、勝った側の司令官なのに、もじもじしてしまうのだ。

「とりあえず、ここの土くれをあそこまで運べばいいんだな」

「う、うん」

「わかつた。間違っていれば、適時指摘しろ」

「え？ う、うん」

「よし」

その族長が土を運び始めた。筋骨隆々たるだけあって早い。いや、それだけではない。

「——おい！ てめえら！ 言われた通り動かんか！」

彼が族長らしく、一喝すると、他のゲルマン人もぞろぞろと従う。

他のローマ人もこれには戸惑ったが、当のユリアヌスがゲルマンと背中合わせに働いている。だから、ローマ人はぎこちなくもゲルマン人を受け入れ始めた。実際、まじめに働いてくれる男たちは大歓迎である。

結果、昨日まで敵同士だった二つの民族が、今日は共に手を取り合って働き始めた。

「ど、どういうこと？」

「ローマ皇帝ユリアヌス——お前の【武徳】^{ヴァルテス}とやらに平伏したくなった」

この台詞にユリアヌスはやられてしまった。何かの罫ではないかとか、そういう疑念も吹き飛び、口も上手く回らなくなったぐらいだ。

「で、でも……今回の講和条件では非ローマ市民の公共事業への参加義務を免除しているよ。

だから、君たちはこの水道工事に参加しなくても……」

「手伝いたいから、手伝う。それはいけないのか？」

「い、いや、君たちの自由意思を妨げる権利はない。けど、本当にいいの？」

「技術を盗みたい。その下心もある——と言ったら、怒るか？」

「そんな事はない！」ユリアヌスは思わず声を上げる。「君たちは技術力を得て、僕らは労働力を得る！ 理想的な共存共栄だ！」

「だったら、文句ないだろ？」

「う、うん」

そして、ユリアヌスと『野蛮人』は背中合わせで、黙々と水道工事を続ける。

まるで、兄と共に奴隷労働をやっていた時のようだった。

——いや、あの時とは違う。二人共に義務ではなく、権利として、労働に参加しているのだ。

歓喜に震えていると、大男がぼつりと聞いてくる。

「『水道』だったか？」

「え？」

「今お前らが作っているモノの名だ」

「う、うん」

「俺はその『水道』とやらを見た事がない。しかし、それがあれば、新鮮清潔な水を常に口にできると言う。まるで魔法だ。信じられない話だな」

「嘘ではない！ 事実だ！ この水道が完成すれば、一々、井戸から水をくみ上げる必要も、川から水を運ぶ労苦も、すべては過去のものとなる！ その分の時間を読書に充てられる！」

「俺は文盲だ。自分の名を読み書きする事すらできない。読書など夢のまた夢だ」
「……ご、ごめん……」

ユリアヌスは反射的に謝罪し、そして、後悔した。彼らゲルマンにとっては文盲こそ誉ほまれで、文弱は恥なのかもしれないからだ。かつてのガリア人がそうであったように……。

これは価値観の押しつけなのか？——とぐるぐる悩む。しかし、

「だが、鹿狩りは好きだ。この『水道』とやらが出来て、鹿狩りに費やせる時間が増えるなら、それに越した事はない」

——皇帝になってよかった……！。 本当によかった……！！

泥にまみれ、汗を流し、しかし、それ以上に瞳が涙で一杯だった。

思えば、この時こそがユリアヌス人生最良の時であったのだろう。

最愛の少女と肌を重ねる時よりも、数倍の敵兵を葬り去る時よりも、至高の権力を手にする時よりも、『野蛮人』と背中を合わせて土を掘っていた時こそ、ユリアヌスの幸せだったのだ。

実際、万事うまくいっていた。

これと前後して、ユリアヌス達は行軍中、ゲルマニアの深森で奇妙な城砦を発見している。建築方式は明らかにローマ式だった。しかし、ほんの数か月前まで敵地であったゲルマニアに城砦を立てる術などあるはずもない。そも最近造られたものではない。最初に建築されてから百年は経っているだろうし、最後に補修されてからも百年は経っている。

「ももももしかして、これって……！」

「はいっ！ トラヤヌス帝の城砦です！ 間違いありません！ 我々はローマ帝国の最盛期の最前線まで辿りつけたのです！ 戻ってこられたのです！」

ユリアヌスが驚愕し、アンミアヌスが返答した。

……これがローマ帝国における弥終いちはての輝きだったのだろう。

それを示すかのように、この時期、ガリア全土において、婚姻と出産の増加が報告された。文明人にとって、出生率は景気の運行指数である。子供の一人当たりにかかる費用で変化はするが、基本的に文明人は金があれば、子供を産み、金がなければ、子供を産まない。当然だ。文明人であれば、産んだ幼子を飢えさせるのは辛すぎる。だからこそ、文明人は子を育てられるか否かを、子を産む前に熟慮する。そこに精神論が入り込む余地はない。子供を産んでも、育てられないと考えれば、文明人は速やかに産み控えへ走る。

（日本の江戸時代でも將軍大名豪農豪商は子沢山だが、貧乏人は子供ゼロが普通だった。明治以降ではそれこそ所得と出生率の相関が統計的に証明できるほどだ）

そして、ローマ人は文明人である。だから、子供を産んでも育てる余裕がなければ、婚姻も出産もしない。逆に婚姻と出産が増加したという事は、若者達が皇帝ユリアヌスの下でなら、子供を育てられると判断した証である。

すなわち、ユリアヌスの治世がガリアにとっての黄金時代であったことを意味する。

……しかし、そのすべてを台無しにする報せが東方より届く。

それは正帝コンスタンティウス二世からの主力兵士引き抜き命令だった。

|||||第十二話（A.D.360）|||||

ユリアヌスは一晩悩んで、決断を下した。

翌日、主だった者をルテティア（現パリ）の宮廷に集め、事情説明会が始めたのだ。

兵士達も初めはユリアヌスに招かれて、光榮そうにしていた。

だが……話を進めるうちに、彼らの顔色がどんどん暗くなっていく。

「つまり、東方あづまでペルシャと国境線がまた揉めているんだ。で、西方よこではゲルマンとの戦争も一段落したろ？そこで君達主力兵士諸君には東へ行き、正帝コンスタンティウス二世の下で、ローマ帝国のため、ペルシャと戦うべし……という命令が届いたんだ」

ユリアヌスがこの結論を述べた時、兵士達の雰囲気は控えめにいつでも最悪だった。

「……それ、ユリアヌス様は納得したんですか？」

「納得は難しい。君達の戦力はかけがえないからね。けど、ローマ帝国のためと言われれば、了承せざるを得ない。東方の防備も疎かにできないのは事実だ」

「……ローマ帝国のためではなく、コンスタンティウス一個人の事情なのでは？」

「そうですよ。俺、この前、聞きました。ユリアヌス様の兄貴も、あのコンスタンティウスに殺されたって！ そうだ……あの時もコンスタンティウスはまず兵士を取り上げたって！」

「これは陰謀だ！ ユリアヌス様、大人しく従ったら、あなたも殺されちまう！」

兵士たちが沸き立った。ユリアヌスは「落ち着け！ 落ち着け！」と宥める。そして、「戦友諸君コンミリテスを信頼するが故、正直に言おう。ここだけの話だ。——僕も同じ事は考えた」

「だったら！」

「が、東方の危機は事実だ！」ユリアヌスは言葉を遮る。「僕にも情報網はある。ペルシャは既に国境のアマダ砦を落としている。これは確認済みだ。諸君が正帝コンスタンティウス二世陛下の人格を疑うのは止めない。しかし、ここは状況で判断してもらいたい」

ペルシャとの戦争となれば、兵力は東方に割かねばならない。これはユリアヌスだろうと、

コンスタンティウスだろうと、最高権力者なら誰もが同じ結論に到達する。また、少なくとも対ペルシャ戦に集中している間は、コンスタンティウスもユリアヌスに危害を加え、わざわざ西方を荒立てる事もない……はずだ。

「それに数年前、対ゲルマン戦が熾烈を極めた時、東側は西へ兵士を送り助けてくれた。なら、今度は西側が東へ兵士を送り助ける番だと思わないかい？」

「送られてきた兵士って、バルバティウス軍ですか？……あいつら、全然役に立たなかったじゃないですか。正直いない方がマシだったでせう」

「東から送られてきた者で役に立ったのは、それこそユリアヌス様ぐらいですよ。ところが、東側の連中は、そのユリアヌス様の足をひっぱってばかりだった。マルケルスがその典型だ」

「いや、あれは不幸な行き違いもあつたわけだし……。それに正帝陛下はこのガリアの困窮の際に麦も送ってくれたじゃないか」

「じゃあ、こつちも東に麦を送りましょうよ」

「ユリアヌス様のおかげで今年はウチの畑も実りがいい。あの時の分は利子つけて返せますよ」

——ああ言えば、こういう……。

ユリアヌスは頭を抱えながら訊ねる。

「……ねえ、君ら、そんなに東方へ行きたくないの？」

「二はい。行きたくありません」

主力兵士一同は一斉に頷いた。

「ペルシャというのは年中夏で熱く、水もほとんどない土地と聞きます。我々ガリア出身者も寒い冬と雪深い森には慣れていますが、そんなところはまっぴらごめんです。そもそもそんな砂漠でお役に立てそうにありません」

「ガリアの防備もまだ十分とはいえません。野蛮人もかなり大人しくなつたとはいえ、油断は禁物です。ここで主力兵士を東に移せば、また人命と農地が損なわれるでしょう」

「それに道路網や水道網といった公共設備インフラの再整備も途中です。何しろ、ガリアはずっと戦乱続きでしたからね。何十年もほつたらかしたつた公共設備インフラがゴロゴロあるんですよ。せめて、これらの再整備が終わるまではガリアにとどまるべきかと」

兵士達は矢継ぎ早に主張する。

——ああ、彼らの愛郷心が裏目に出ている。

ユリアヌスは嘆いた。

これまで何度も彼らの愛郷心には助けられてきた。ド素人の司令官でも、何とか軍事行動が可能だったのは、まさに彼らの故郷を愛する心があつたからだ。強大な敵を打ち破れたのも、彼ら一人一人の『家族を守りたい。故郷を取り戻したい』という主体的な意思があつたからだ（極言すれば、ユリアヌスなどはその想いを受け止めた器でしかない）。

しかし、それは愛郷心であつて愛国心ではない。

つまり、目で見える故郷を愛する心であつて、頭の中にしかない国家を愛する心ではない。そう——彼らガリア兵士にとつて、国家とは殆ど空想上の産物だった。無理もない。彼らの大多数は故郷で生まれ、故郷で死ぬ。目に映るのはガリアの大地、あとはせいぜいが隣接するブリタニアやヒスパニア、そして、ゲルマニアだ。遙か遠方のオリエントなど、神話の世界と大差がない。生身の実感がある故郷の危機に対しては戦える者達も、そんなあやふやなもののために命を投げ出す事は出来ないのだろう。

——むしろ、その方が自然だ。

とすら思う。読書家ゆえに夢想家のユリアヌスとて、東方生まれである以上、西方事情には疎かった。実際にガリアへ足を運ぶまでは、現地の危機感など、まるでわかつていなかった。そして、今の彼らはちょうどその逆……いや、もっと酷い。古代人である以上、仕方ないが、ユリアヌスと違い、彼らの多くは読書などしない。だから、自分の身体感覚を頼りに生きる。それがトゥールートのような優れた判断力に繋がっているのだから、羨ましくもある。しかし、問題が大きくなってくると、部分最適が全体最適を阻んでしまう。具体的には、このガリアの平和には東方の防衛線も守らねばならず、そのためには兵力を割かねばならないという簡単な理屈がわかつてもらえない。

せめて、東西の物流がもっと盛んなら——ガリアの市場で東方の物産が並び、それらを目にする事で、東方を身近に感じていれば——彼らも東方の危機に親身になったかもしれない。が、現実には戦乱で物流は途絶えつつあり、地産地消の傾向が強まっている。こうなると、東方の物産、東方との交流は金持ちの贅沢となる。それこそ、あのマルケルスのように。

これでは兵士達の共感を得られるはずがない。

おまけに兵士達の主張そのものも正論なのだ。

例えば、

「大体、契約違反じゃないですか？」

というのがその典型だ。

「俺達がローマ軍に入る時の契約書に書いてありましたよね？ 任地はガリア及びその周辺であり、アルプス以西に限る——と。なのに遙か東のペルシャに行けつて？ それが法の民たるローマ人のやる事ですか？」

……返す言葉がない。現にユリアヌス自身もコンスタンティウス向けの弁明で、この論法を使っている。どう言い繕つても、これはコンスタンティウス側に非があるのだ。

——コンスタンティウスも何を考えているのだろうか？

ユリアヌスは思う。

兵士達に東方向きを強しいれば、コンスタンティウスは恨まれるだろう。……と言うよりも、もう恨まれている。

兵士達の一部は『第一陣』として、既に東方向き出発準備中だ。が、彼らの内心は言うまでもなく不満たらたらである。当り前だ。耕すべき農地や守るべき家族と離れたい奴はいない。ユリアヌスも彼らの家族との別離には最大限の配慮を行っている。例えば、郵便の使用権限を与えるなど、だ。……しかし、その結果は正帝コンスタンティウス二世への怨嗟に繋がる。

——コンスタンティウスは自身を恨む兵士を連れてペルシャと戦う気なのか？

それとも、兵士の心情など、考慮に値しないのか？ たしかに民主的なユリアヌスと違い、コンスタンティウスは専制的な君主だ。しかし、兵士の信望無くして戦争に勝てると思う程、愚かではなかったはずだ。

——やはり、エウセビア様の死は大きかったのか……？

……この少し前、正帝コンスタンティウス二世最愛の皇后エウセビアが病死している。

ユリアヌスは大いに悲しんだが、コンスタンティウスもまた深く悲しんだはずだ。その結果、コンスタンティウスは精神の均衡を崩したのかもしれない。兄ガルス時には見せたバランス感覚が今回見られない。実務的に考えても、皇后エウセビアの情報網がなくなれば、ガリアの状況がわかり難くなる。政治的に考えても、外戚代表がいなくなった事で、宦官の専横が止まらなくなる。個人的に考えても、エウセビアという緩衝材がなければ、コンスタンティウスとユリアヌスの間は険悪になりがちだ。

——どれもこれも、コンスタンティウスの判断力低下に繋がる。

正帝コンスタンティウス二世は暗君と呼ばれていた。しかし、暗君という言葉には『少なくとも暴君ではない』という含意があった（暴君というなら、むしろ、それはユリアヌスの方だ。ユリアヌスは政治改革の結果で名君と呼ばれているが、既得権益を喪失した者にとっては暴君でしかない）。

——しかし、この暗君は心の支えを失った事で、暴君の道を歩もうとしているのか……？。

ユリアヌスの不安に共鳴したかのように、兵士の一人が進み出る。

「ユリアヌス様、ユリアヌス様が我らの忠誠をお疑いなら、今、ここで自害してその証を立てましようか？ あるいは北の蛮族軍に単騎で突撃してきましようか？」

「……これまでの戦働きで諸君の忠誠は証明済みだ。無意味な事をする必要はない」

「光榮至極です。しかしながら、この忠誠はユリアヌス様にこそ、捧げ得るものなのです」
決して誰にでも捧げられるものではない——彼はそう言った。

「ユリアヌス様は決して使え易い主君はありません」

「……融通きかない性格だっという自覚はあるよ」

「はい。だから、陛下は敵前逃亡を図った大隊長トリブヌスを容赦なく処刑し、さらには遺体の埋葬すら禁止されてきたのでしよう」

——それは軍規だから仕方ないだろう！ 僕だって好きやっている訳じゃない！

ユリアヌスは叫びたい衝動をこらえた。

しかし、実際、その通りなのだ。トゥルートが軽口を叩こうが、新兵が生意気を言おうが、ユリアヌスは構わない。今のように主力兵士達が反抗的だろうが、あの日のように少女が石を投げる『抗議』をしようが、ユリアヌスは構わない。しかし、戦場での敵前逃亡は許せない。……ユリアヌスだけではなく、他の兵士の命を奪うからだ。

だから、ユリアヌスは味方の兵士を峻厳に処刑している。

「それでもなお、私はユリアヌス様にお仕えしたいのです」

その兵士はそう明言した。

「処刑された兵士にすら同じ思いの者はいました。――何故だか、わかりますか？」

答える術はない。その兵士の目に浮かぶ涙を見たからだ。

「ユリアヌス様が我らの望む平和を実現されるからこそです。ユリアヌス様の御命令がその礎いしづえだからこそです。ユリアヌス様は蛮族を一掃されました。それどころか、今やゲルマンも我らと共に土を耕す仲間です。ユリアヌス様の下で戦うという事はそんな未来に貢献できるという事です。だから、死ねと言われて、死ねるのです。しかし、それはユリアヌス様のお言葉だからです。……我らの命、そこまで安くはありません……！」

民ミョウの声は神カミの声――後の社会契約論にも繋がる理念だ。

その日は何も言えず、ユリアヌスは引き下がった。

だが、それでも命令は命令である。ユリアヌスは従わなければならない。それが副帝という悲しい中間管理職だった。

そんな説得が一月に及んだ頃の事だ。

その日もユリアヌスは恒例となった主力兵士の説得を続けていた（ユリアヌスが丹精込めて育成してきた主力兵士は実に忍耐強い。懲罰的な意味で野宿をさせているが、全く堪こたえない）。ちなみにこの日は忠誠の観点から説得してみた。兵士達にユリアヌスへの忠誠があるように、ユリアヌスにも正帝コンスタンティウス二世への忠誠の義務がある――という論法だ。

「なあ、皆わかってくれ。僕は本来副帝カエサルなんだ。いやたしかに僕は皇帝インペラートルの名を何度も用いた。兵士を集め率いるにあたって、無位無官ではまじかっただからね。けど繰り返すよ。僕は副帝カエサルだ。で、あるが以上は、正帝アウグストゥスの命令に従わざるを得ない」

「じゃあ、ユリアヌス様も【正帝アウグストゥス】になればいい」

禁断ともいふべき反応がサラッと出てきた。

「あ、あの君、自分が何言ってるかわかっている？」

「コンスタンティウスが怒って攻めてくるって事ですか？ その時は我々が先陣で戦います。いえ、むしろ、こちらからアルプスを越えて攻めに行きましょうかね？ で、ユリアヌス様がローマ帝国の唯一皇帝になればいい」

とんでもない事を言いやがった。こいつは反乱を推奨したのだ。

ユリアヌスは驚き、その兵士を咎めようとした。

ところが、他の兵士達はその暴論に――そうだそうだ――と賛同の意を示す。

「いや、いやいやいや！ 最初のストライキの理由はどこに行ったんだよ?!」

東方に行きたくないからと反抗していた連中が、東方に行きたくないから東方に攻め入ろうという。こんな無茶苦茶な話があるか！

「だから、これは妥協案ですよ。ユリアヌス様がどうしても東方で戦えというなら、戦います。でも、それは宮殿の奥の引っ込んであるコンスタンティウスのためではない。俺たちガリアの民草のために尽くしてくれたユリアヌス様のため、ユリアヌス様の下で戦う。これが絶対条件です」

そうだそうだ――と兵士達はさらに賛同の意を示す。

「……っ」

嫌な予感はしていたのだ。

ユリアヌスは鈍い男だ。しかし、それでも気付いていた。自分を見る兵士の目がこの五年で激変している事に。

最初は子供を馬鹿にする目だった。

幾度かの実戦の後、反抗的な上級指揮官を更迭した頃から、互いに命を預け合う仲間を見る目になってきた。

そして、あの会戦の後には英雄を見る目になってしまったのだ。戦後復興を成し遂げつつある今ではすっかり神君扱いである。

下地はあった。……とはいえ、この流れは出来過ぎている。

――「誰に唆された？」

ユリアヌスはその言葉を飲み込んだ。

おそらく、友人知人を何重にも経由しているはずだ。その過程で同調者が集まり、彼らの意思をさらに強固にする拡大再生産が行われたのだろう。

そして、その根源はおおよそ察しが付いているのだ。

翌日の夜明け、兵士の一団が宮殿に乗り込んできた。

ユリアヌスもさすがに驚いたが、それよりもむしろ彼らの口にする台詞に脅えた。

「我らが正帝ユリアヌス万歳！」

その声はセーヌ河の向こう岸にまで、届く程に大きく轟いた。

「我らが正帝ユリアヌス万歳！」

「我らが正帝ユリアヌス万歳！」

その吐息は酒臭かった。泥酔しているのは間違いない。まれに素面の者も混じっているが、彼らは彼らで酒精以外のものに泥酔していた。

兵士の一人が己の首にかけていた金鎖を外した。戦時の報酬品であり、純金故に当然高価なものである。だが、彼は惜しげもなく、それを外して、ユリアヌスの頭に載せた。それこそが真の帝冠であると言わんばかりに。

さらに彼らはユリアヌスを寄つてたかつて抱き上げた。基本貧弱なユリアヌスに抵抗できるはずもない。為されるがままになっていると、ユリアヌスは楯の上に押し上げられた。

あの S P Q R II ^{Senatus Populus Romanus} 【元老院並びにローマ市民】の四文字が描かれた楯の上に――。
そして、彼らはユリアヌスを乗せたまま、市中を練り歩いた。

「「我が正帝ユリアヌス万歳！」」

「「我が正帝ユリアヌス万歳！」」

「「我が正帝ユリアヌス万歳！」」

……実に品性に欠ける儀式だった。東側のコンスタンティウス二世などが見れば嗤うだろう。なるほど、賤しい。これは『野蛮人』^{バルバロイ}に由来する古札なのだ。

だが、それがガリアの伝統風俗に基づいた《王》の推戴であったのかもしれない。

いや、あるいは人類原初の《王》の推戴であったのかもしれない。

文字通り、ユリアヌスは祭り上げられたのだった。

トゥルートはシャハラザードを殴り飛ばした。

倒れたシャハラザードは、しかし、トゥルートを睨み返す。

「今回は問答無用というわけですか？」

「黙れ！ 貴様のせいだユリアヌスは……！」

「……いい加減目障りね」

「何だと!？」

「ちよつと上手く誑し込んだからって、ユリアヌス様をわかった気になるなんて――馬鹿女の相手は疲れるって言っているのよ」

「貴様……！」

「じゃあ、聞くけど、ユリアヌス様が気付いていないと本気で思っているの？」

「そ、それは……」

ユリアヌスもとつく気付いているはずだ。――正帝擁立の影にシャハラザードの煽動がある事ぐらい。

なにしろ、突撃馬鹿のトゥルートにすら理解できる構図なのだから。

「だが、それでもあいつはお前を信じているんだぞ！ それなのに所詮お前はペルシャの手先でしかないのか？」

「ほーら、わかっていない」

「どういう意味だ?!」

実を言えば、わかった気になっていた。シャハラザードはペルシャの娘だ。よって、東方のペルシャのために働く。ローマ帝国の西側でユリアヌスが政権を立てれば、どう取り繕ってもローマ帝国の東側は動揺する。最悪内戦もあり得る。ペルシャの付け入る隙ができる。それがペルシャの狙いであり、シャハラザードの企みである……。

武辺者の悲しさだろう。この時のシャハラザードは本気でそう思っていた。

それどころか、そういった構図を推測できるようになった事を成長だとすら考えていたのだ。実際、以前はわからなかったユリアヌスとサルステイウスの会話が今になって理解でき始めていたのだから。

しかし、シャハラザードはわざとらしくため息をつく。

「この際、言わせてもらおうけど、ユリアヌス様はあなたの弟とは違うのよ。二十歳過ぎなのに、『弟』といちやつくのが好きな変態さんにはそれもわからない？」

トゥールトは頭に血が上った。しかし、ここで昂たかぶれば、第二文目を認めたと受け取られかねない。だから、トゥールトは大きく息を吸い、ゆっくりと第一文目にのみ、問い返す。

「……ユリアヌスにも野心があるというのか？」

「ユリアヌス様には必要があるのよ」

シャハラザードは明晰に論理を説く。

「歴史物語にもよくあるでしょ？ 有力な將軍が皇帝になろうとする時、將軍本人の自薦ではなく、その部下による他薦に基づくとね。將軍は何度も辞退するんだけど、部下の熱望により、洪々皇帝に即位する流れ。わたしも子供の頃は笑っていたけどね。皇帝になりたい野心家の、薄っぺらい謙虚さを宣伝する使い古された芝居だって。——でも実際ね、熱望する側になるとわかるわ。人の上に立つ者はそうでないといけないって」

すなわち、人の上に立つ者は、あくまでも人に支えられて上に立つのだ——と。

支える者、下から持ち上げる者なくして、人の上に立つなど、ありえないのだ——と。

「野蛮人の王様だってさ。俺が王様だーって、一人で叫ぶだけで、王様になれる？ そんな訳ないわよね。あくまでも臣民あつての王よ。王を王足らしめんとする多数の意志に支えられ、初めて王は王足りえる。ローマみたいな文明国なら尚の事——この程度の理、ユリアヌス様もおわかりよ」

「っ！ 煽動はユリアヌスの指示か!？」

「まさか。あれだけ多忙なユリアヌス様にそんな暇あると思う？ 言っておくけど、わたしにしたところで、似たようなものよ。正帝推挙みたいに面倒な話にまで踏み込む余裕はないわ。」

ただ、ユリアヌス様がガリアで采配を振るい易いように『工夫』はした」

曰く『ユリアヌスは勇敢な將軍だ』

曰く『ユリアヌスは誠実な行政官だ』

曰く『ユリアヌスこそ《皇帝》に相応しい』

シヤハラザードはそう言った声をばら撒いたのだという。後世でいう世論誘導を行ったのだ。これが正帝推戴の遠因になったと言われれば、首肯せざるを得ない。

とはいえ……たしかにそれは政策説明と紙一重だ——そのくらいはトゥルートにもわかる。だから、

「それとも、反対派への対抗弁論を行わずに、税金を半分にするような政治改革ができる？ そんな事、東方のような専制国家でも無理よ。まして、民主国家の気風が強いこの西方ではね」

と言われれば、トゥルートも口籠ざるをえない。

「これは必要の結果であり、必然の結果なのよ」

そして、シヤハラザードは最後に優しい声で言った。

「安心なさい。わたしが本当にユリアヌス様の意志を逸脱し、ユリアヌス様に有害となれば、ユリアヌス様はちゃんとわたしを殺すから」

「……！」

「そして、【筆頭衛士】^{プリムス・リクトル}——皇帝陛下の懐刀である貴女^{あなた}に、その命令が出ていないのです。う？ なら、わたしはまだユリアヌス様の御心に沿っている事になる」

「……シヤハラザード、お前……」

「何？ 惚れた主^{マスター}のため、己を捧げ尽くしたい——って、あなたにはわからない？」

時にA.D.360——。

ユリアヌスは正帝推戴を受諾した。